

はたらくワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

昨年度の研究から、本校高等部生徒に「在学中に学びたいこと」について調査した結果、43%の生徒が「作業学習や現場実習などで働くことを学びたい」「いろいろな職場を知りたい」と回答した。また、卒業生が在学中に役立った学習は「作業学習」「進路学習」と答える割合が高いことも明らかになった。これは、生徒が「働く」ことに関する学びに関心が高く、卒業後も役に立っていると考えていることが表れている。

また、就労面が安定していることが、余暇を楽しむことや生涯学習に向かうことの前提となることも明らかになった。

はたらくワーキンググループ（以下：はたらくWG）では、働くことに関する学びのニーズの高さと、豊かな生活の基盤となる、仕事を続けていく力の重要性から、「働く」視点での生涯学習力を高める教育課程について考える。有効な学習内容や環境、地域社会とのつながりの在り方を学部縦割りの視点で検討し、実践する。そこから見えてきたキーワードや成果と課題を、他のワーキンググループから出された提言と関連させながら教育課程の編成に生かしたい。

2 研究の内容と方法

（1）「働く」視点で考える生涯学習力の検討

「働く」という視点で「生涯学習力」を捉えるために、はたらくWGでワークショップを行った結果、「働く」ための要素は、「自分で立てた目標に向かう」「役割を果たす」「誰かの役に立つ」と、大きく三つに分類することができた。そして、その基盤には「働く意欲」が欠かせないことを確認した（図1）。

上岡(2013)は、「働く意欲がなければ働く生活の質を高めることはできません。質の高い働く生活が人生の質を高めます」と述べており、まさしく「働く意欲」が本校の目指す「生涯学習力の向上」につながると考える。

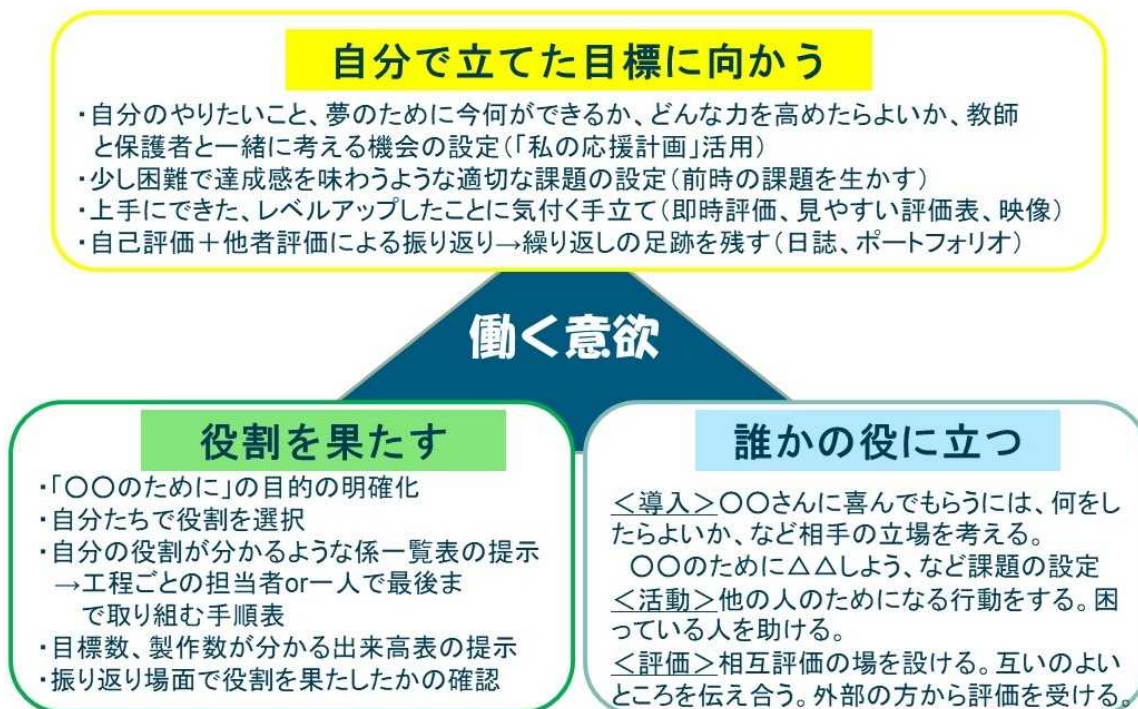


図1 働くための要素

(2) 「働く意欲」を高める授業づくり

「つながりミーティング」の実施

本校の生涯学習力を高める授業づくりのポイント「かかわる」「きづく」「やってみる」から、はたらくWGでは、「きづく」に着目した。「おもしろそう」「やってみたい」という内発的な興味・関心から、「なぜこうなるのか?」「どうしたらうまくいくのか?」という疑問をもち、「分かった」「できた」という課題解決につながる。そのプロセスが、児童生徒の「意欲の向上」につながると捉えた。

年間指導計画を基に、学部縦割りで学習内容を検討する「つながりミーティング」では、中学部の作業学習で生徒に「気付いてほしい視点」として以下の意見が出された。主に「自己理解」と「他者理解」に分けることができた。

はたらくWGで出された「生徒に気付いてほしい視点」

自己理解	他者理解
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の調子 ・自分のよさや課題 ・自分の成長 ・どうすれば、うまく作れるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・客のニーズ ・何のために作るか ・製品の価値(よさ) ・友達の頑張り

「はたらく検討会」と全校授業研究会の実施

はたらくWGと中学部職員が共に作業学習を検討する「はたらく検討会」では、生徒の「気付き」を次時に生かせるよう、作業日誌の様式を検討したり、生徒一人一人の「気付き」に関するエピソードを共有したりした。全校授業研究会では、働く意欲を高めるための「きっかけや背景」、「働く意欲につながる視点」について、ワークショップを基に他学部の視点から意見交換、協議を行い、研究協力者から講評をいただいた。

終日作業の振り返りを記入する場面で・・・

Sさん: 検品は簡単でした

教師: 検品中の動画を見てみましょう

Sさん: あ・・・隙間がありました **気付き**

教師: ということは?

Sさん: 検品はまだ難しいです **意欲**
頑張りたいです

作業日誌の様式変更による変容

・チェック項目が多い
・目標と評価が曖昧

・気付きが、次回気を付けること(意欲)につながる

- 気付きが見られた場面
- 気付きの背景
きっかけ
- 働く意欲につながる場面

成功体験のつみかさね
丁度よい量の材料
気付きの予備
なぜしたのか
気付きを促した
意欲を促した
意欲を促した



< 講評 抜粋 > 秋田大学教育文化学部准教授 前原 和明 先生

- ・教師にとっては「気付いてほしいこと」も、生徒にとっては「認めたくない」こともある。
- ・「目的」だけでなく、「ストーリー（見通し）」を伝えたい。
- ・「できないからできるようになる」スキルの向上だけでなく、「できなくても、どんな関係性だったら楽しいのか、どのように助けてもらうのか」が大切。誰かと比較すると将来くじける。
- ・「できない」「できる」を知ることは、「気付き」のために必要。スキルを単純に教えるのではなく、教育の中でどのように必要性を感じさせるかがポイント。
- ・「気付き」を生徒に分かりやすく言語化することも教師の専門性。

< 講評 抜粋 > 障害者就業・生活支援センター長 牧野 真吾 氏

- ・「楽しい仕事」はないけれど、「楽しく仕事」はできる。授業にも「楽しい要素」を入れたい。
- ・卒業生の立場で考えると、「働く」上で大切なことは「自己有用感」などより「お金をもらう」こと。
- ・自分が行った「行為」に対する「反応（利益）」がモチベーションになる。利益が生まれなかったら、それを分析すればよい。「ストーリー」と、自分を客観視するための「メタ認知」の視点が大切。
- ・製品の価値は、不特定多数の方が求める価値だが、企業の視点からすると、誰に売るのが、ターゲットを絞りたい。「売れたらおもしろい」を感じてほしい
- ・「ほうれんそう」よりも、今は「かくれんぼう（確認・連絡・報告）」を身に付けてほしい。

(3) 「働く意欲」を高める要因の検討

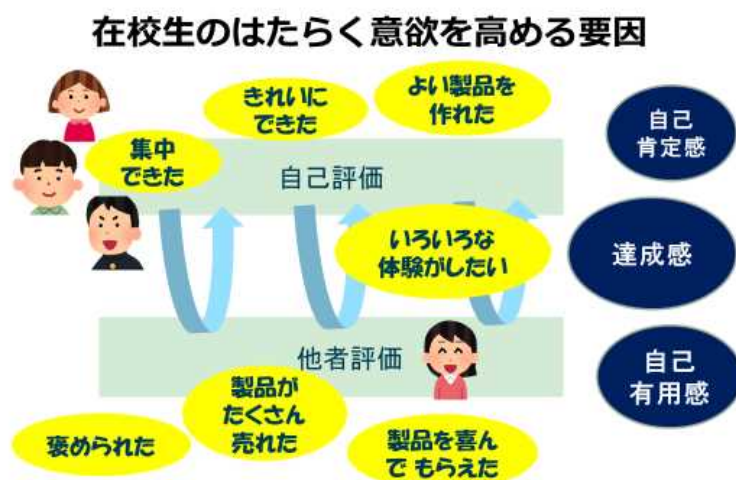
在校生と卒業生へのインタビュー分析

「働く意欲」を高めるための要因を、本校在校生と卒業生数名にインタビューを行い、その受け答えから明らかにしようと考えた。「働くことは好きか、嫌いか。その理由は何か?」「どんなことがうれしいか。辛いか?その理由は何か?」「もっと頑張りたいと思うのは、どんなときか?」の項目で質問を行い、その答えから見えてきたことを分析した。

ア 在校生（中学部生4名、高等部生6名）へのインタビューから見えてきたこと

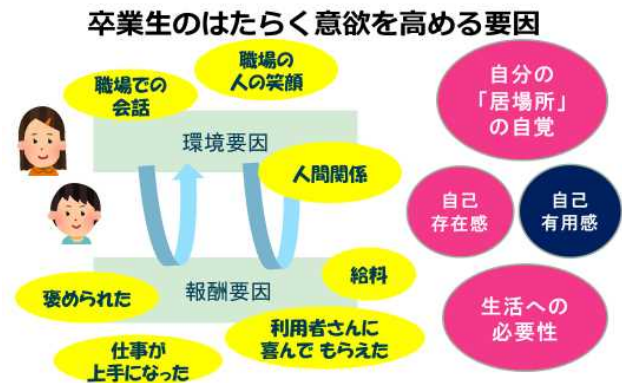
在校生のインタビューから、9割の生徒が「働くことが好き」ということが明らかになった。「きれいにできたとき」「よい製品が作れたとき」など、自己評価が高まったとき、「褒められたとき」「製品を喜んでもらえたとき」など、他者からの評価が意欲に結び付いているケースが見られた。

今年度は実際に客に対応する販売活動が行われなかったが、「客に喜んでもらいたい」という思いが意欲に結び付いている生徒もいた。



イ卒業生（一般就労1名，就労継続支援B型1名）へのインタビューから見てきたこと

卒業生へのインタビューからは，職場の人間関係（働きやすい雰囲気）などの環境要因，「給料がもらえる」や「利用者に喜んでもらえた」などの報酬要因が見られた。一名の卒業生は「働くことは好きではない」と話しながらも，「自分の居場所があるという自覚」「実生活への必要性」に言及し，それが「働き続ける意欲」に結び付いていることが明らかになった。



他校の実践から見てきたこと（夏のセミナーより）

8月に本校で実施した「夏のセミナー」では，県内外6名の先生方より，「働く意欲」が高まるための具体的な実践例をアンケートで答えていただいた。以下に抜粋を記載する。

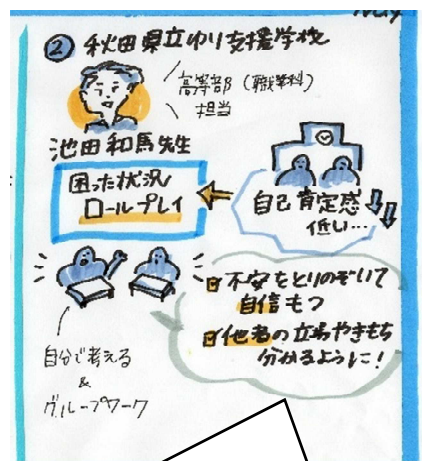
ア「〇〇のために〇〇しよう」と，生徒が活動する上で目的や楽しみをもてるような工夫

- ・定期的に自分の未来予想図（1年後，卒業後，10年後）を作成する活動。
- ・学習の成果が，地域や社会につながっていると伝える（よい製品を作るということは，売れるだけでなく，誰かを幸せにできる。製品や作業班の社会的価値を高めることにつながる）。
- ・スポーツ観戦が好きな生徒が多く，そのためにお金を貯めたり，スマートフォンを正しく使えたりする必要があるなど，日頃から将来の働く目的について話題にする。
- ・「ができると，将来をするときにで役立つからやろう」とできる限り具体的な展望を伝えて，意欲を湧かせたり意義を感じさせたりすることを意識している。



イ生徒自身の「気付き」を深める工夫

- ・自分の強み（希望業種に合った適性）を考える学習（実習事前学習などに関連させて）を計画，実施する。
- ・体調やその日の気分などで作業に身が入らないときに，自分自身でどう対応すればよいか考えたり，やりとりしたりする機会を設定する。
- ・生徒によっては質問の答えを選択できるようにする。気づきの発言を黒板等に記録する。
- ・話し合い活動で自分との違いを考えたり，相手のよいところを認め合ったりする場を設定する。
- ・困った場面への対応の仕方や相手の立場を考えることを，ロールプレイを通して学ぶ。



「夏のセミナー」では，他校の実践，本校のインタビュー分析を Zoom で共有し，情報交換，意見交換を行った。まちづくりファシリテーターの平元美沙緒氏からは，グラフィックレコーディングの協力をいただいた。

3 教育課程編成に向けた取組

(1) 働く意欲を高めるポイントの整理

「働く意欲」を高める授業づくりの実践、「働く意欲」を高める要因の検討を通して、意欲を高めるための様々なキーワードが出された。はたらくWGはそのキーワードの中から、「ストーリー」「気付き」を特に大切にしたいと考えた。「私の応援計画」を活用する中で、生徒自身が「気付き」を基に自己理解を深め、「将来へのつながり（時間軸）」「地域社会へのつながり（空間軸）」を基に自分なりの「ストーリー」を考えるようになってほしい。この二つの視点は、生涯学習力を高めるための教育課程の編成のポイント（プランニング、コネクト、セレクト）にも結び付くと考えた。

「働く意欲を高める」ポイント

「〇〇のために△△する」のような働く上での目的や楽しみ（**ストーリー**）をもつ



「働く意欲を高める」ポイント

「自分はこれが得意（苦手）」「〇〇したら、うまくいった」など、「**気付き**」を基に自ら取り組もうとする



働く意欲を高めるための教育課程編成のポイント

Planning 自分の将来に対する見通し（イメージ）をもち、主体的に計画・実行する。

☆中高作業学習の連携

作業コラボ会議・・・職員が「態度面」「作業製品面」に関して共通理解
代表者会議・・・作業班代表が情報交換「高から学びたいこと」「中に伝えたいこと」

Connect 身の回りの地域社会（働く場所、製品販売できる場所など）について学ぶ。

☆製品販売に向けた連携

販売会に向け気を付けることを経験のある高等部生徒が中学部生徒に伝達
（どんな製品が売れるか、コラボできるか、など）

Select 自分が得意な活動、好きな活動などが分かり、自分で選択する。

☆授業の工夫

希望する作業班、作業内容を自ら選択する場面の設定
目標設定と振り返りがしやすい工夫（作業日誌の工夫、板書の工夫）

(2) 教育課程の編成に向けて

学部間の連携に向けて

はたらくWGでは今年度、中学部と高等部の作業学習について、連携を深めてきた。「作業学習コラボ会議」は、教員間で「態度面」「作業製品面」の両面から、協働できる点を検討し、「作業学習代表者会議」は、中・高の作業学習の代表生徒（各班1, 2名）が集まり、態度面や作業面で「中学部に伝えたいこと」「高等部に質問したいこと」を意見交換し、作業製品として連携できそうなことについてもアイデアを出し合った。

<高等部からの意見>

- サービス班・・・**地域貢献活動**（ありがとうと言われる喜び）
 汚れを残さないような拭き方の工夫（テーブル、窓）
 コーヒーは同じ味にするために、時間・水を一定に
- 陶芸班・・・**質の高い製品作り**（カレー皿作りなど）
 場面に応じた挨拶、集中力が大切
 石こう型に泥を流し込む作業は難しく大変
- ハンドクラフト班・・・**注文にすぐ対応できるように予備の準備**
 さをり織りが人気（トートバッグなど）
 失敗したらすぐに報告、相手を見ての挨拶が大切

<中学部からの意見>

- ・働くために必要なことを教えてもらった（立ち仕事多く、**体力が必要**）
- ・**挨拶**や、**集中力**が大切
- ・さをり織りなど、**丁寧な作業**が手本になった



「作業学習代表者会議」の成果

生徒の意識の変化

- 中学部・・・高等部に対する**見通し**、
 先輩への**憧れ**
- 高等部・・・役に立っているという
自己有用感 責任感

コラボ製品の検討例

- ・高等部サービス班のコーヒーに合う**コースター**を中学部クラフト班が試作
- ・さをり織りの「はぎれ」を**中学部のバッグ**作りに活用
- ・高等部の製品販売に**エコバッグ**を活用



中学部、高等部生徒が実際に互いの作業製品を見合い、それぞれのよさに気付き、認め合い、作業学習で大事にしていることを確認し合う貴重な時間となった。中学部は、先輩から学んだことを同じ作業班のメンバーに伝えることで学びのつながりが見られ、高等部生徒は後輩に教えることで、普段大切にしていることを改めて意識するとともに、自身の自己有用感や責任感にも結び付いた。

今年度、作業製品を販売する機会は少なかったが、今まで各学部で実施していた販売会を、中・高共同の販売会「わかはとショップ」と位置付け、共にオリエンテーションで学び、製品準備や実際の販売も共同で行うことができた。来年度に向けて、作業製品販売の目的を共通理解し、生徒自身がさらに意欲をもって取り組めるよう、具体的な計画を立案する。



教育課程編成のスケジュール（中学部）

中学部では、今年度の10月から3月まで、「働く意欲を高めるための教育課程編成のポイント」を基に、「小・中・高の連携」「地域との連携」「作業学習の検討」という視点で計画的に検討を行った。中学部と高等部の教員のみならず、生徒同士が代表者会議で情報交換、意見交換をする中で、多くの発見が見られた。検討を重ねる中で、中学部の作業学習の時間を増やす必要性や、現状の作業班の見直しの必要性が話題になり、中学部の「作業学習の時間を一時間増やす」「作業学習のねらいを焦点化し、クラフト班、ソーイング班、ファーム班という三つの作業班に編成し直す」こととし、来年度に向けた準備を進めた。

中学部 教育課程編成に向けて（はたらく視点より）

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域との連携			通の市の振り返り		地域の人材活用		
	作業販売	高3から学ぶ会 (通の市)	作業製品販売 わかはと祭(カタログ注文)		来年度の販売会に向けて ・販売、啓発計画 ・高等部と連携		
小中高の連携		製品販売に向けたアイデア				製品販売会	
	進路学習	中3現場実習見学 応援計画振り返り	高等部現場 実習報告会		終日作業 高等部体験 職場体験	応援計画振り返り つながりマップ活用	
	中高連携		中高作業 コラボ会議 (職員)	中高作業 代表者会議 (生徒)		中高作業 代表者会議 (生徒)	
	小中連携			小6 作業体験			
作業学習の検討	作業班の検討		現状の課題の整理		新たな作業班の決定 ・新年度に向けた計画・準備		
	作業時間		来年度の案を検討 →1h増やす		新たな案で試行		

紙工班 クラフト班 ハーブ加工班

中学部作業班

クラフト班
CRAFT TEAM

- 簡単な道具（はさみなど）を安全に扱う力
- 手先や指先を上手に使う力
- 色彩デザイン

中学部作業班

ソーイング班
SEWING TEAM

- ミシン等の基本的な使い方の習得
- 素材に応じた扱い方
- 確実性よく見て合わせる安全に配慮する

中学部作業班

ファーム班
FARM TEAM

- 農作業に使う道具の扱い方
- 体力 根気 持久力
- 作物が成長する姿を見通す

4 まとめ（今後に向けて）

はたらくWGの取組より、生涯にわたって学び続けることの一助となる「働き続ける力」を育てるためには、「働く意欲」が基盤であり、意欲を高めるためには、「ストーリー（働く上での目的や楽しみを見付ける、など）」「気付き（自分自身を知る、など）の視点が大切であることが分かった。そして、その視点を実際の教育課程の編成として具現化するためには、学部縦割りの「学びの積み重ね」と、地域社会と共に学ぶ「学びのネットワーク」の視点も欠かすことができない。それは、他のWGの実践からも明らかになっている。

今年度、はたらくWGは中学部の作業学習の授業実践と関連させながら研究を進めてきた。今年度の実践を踏まえ、来年度は下表のように「小・中・高のつながり」「地域社会とのつながり」をより意識し、計画的に実践したい。そして実践後は授業を含めてしっかりと評価し、見えてきた課題について、改善を図っていききたい。その一連の流れが、本校研究「生涯学習力を高める教育課程の編成」の具現化に結び付くと捉えている。

生涯学習力につながる「働く」教育課程(中学部案)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事等	前期始業式 入学式 新入生歓迎会 全校運動レク	副校教育実習	宿泊学習	全校集会 半校集会	夏季休業 半校まつり 全校集会	主幹教育実習 修学旅行	前期終業式 秋季休業 後期始業式	介護等体験 わかほと祭	全校集会 冬季休業 小中入学準備会	高入学準備会 全校集会 公衆研究協議会	生徒会選挙 卒業を祝う会	卒業式 修了式 春季休業
総合的な学習の時間(進路)	応援計画オリ(作り方) ゆめシート+応援計画を作る(学級) 生徒個別面談(→保護者面談)	掲示開始	高等部現場実習から学ぶ	働くために(進路指導主事講話)		後期応援計画オリ~私の夢 ゆめシート+応援計画を作る(学級) 生徒個別面談(→保護者面談) つながりマップ作成		高等部現場実習から学ぶ			評価応援計画オリ~まとめ ゆめシート+応援計画を作る(学級) 生徒個別面談(→保護者面談)	
作業学習	作業オリ	布川造園から学ぶ①	第1回終日作業	中高代表者会議①	布川造園から学ぶ②	布川造園から学ぶ③			職場体験に向けて先輩から学ぶ 中高代表者会議②	職場体験(2,3年) 高等部作業体験(1年) 第2回終日作業		
	仕事を覚えよう		役割を果たそう		誰かの役に立とう			目標に向かって協力しよう				
販売会			通の市				通の市	わかほと祭 製品販売			わかほとショップ	
高等部		通の市	I期現場実習	わかほとショップ		通の市	II期現場実習 わかほとショップ		Dスタ セレクトスタディ			
小学部						小6作業学習見学		小6作業学習体験				

くらすワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

「くらす」を切り口にし、生涯学習力を高める教育課程の編成に必要な要素や体制づくり、次年度の高等部の教育課程について提案する。

2 研究の内容と方法

くらすワーキンググループ(以下:くらすWG)では、「くらす」の捉えについてのワークショップ、授業づくり、WGの提言、高等部の教育課程の四点について検討を行った。

くらすWGの研究協力者として、右の三者に依頼し、各分野からの情報提供や助言をいただきながら研究を進めた。

研究協力者

小山高志氏（特別支援教育課 管理主事）
* 障害者の生涯学習や特別支援教育の動向

櫻田 武氏（大仙市教委 参事兼指導主事）
* 教科、問題発見・解決やユニバーサルデザインの観点を含めた授業づくり

牧野真悟氏（障害者就業・生活支援センター長）
* 卒業生の就業や生活面の相談、支援事例、今後の展望

（1）くらすワーキンググループでの検討

くらすワーキンググループの方向性について

ア「くらす」に関わる学習内容や行動

くらすWGでは、WGでの研究を進めるに当たり、学校で扱っている学習内容、育成する力について、学部ごとにまとめた（図1）。各学部において、「くらす」に関わる学習内容は、「衣」「食」「住」「人間関係」に分類することができた。次に、社会人の一日の生活に着目し、行動を洗い出した（図2）。この二つを挙げた段階で「くらす」に関わる内容は、幅広く、多岐にわたることが共有できた。

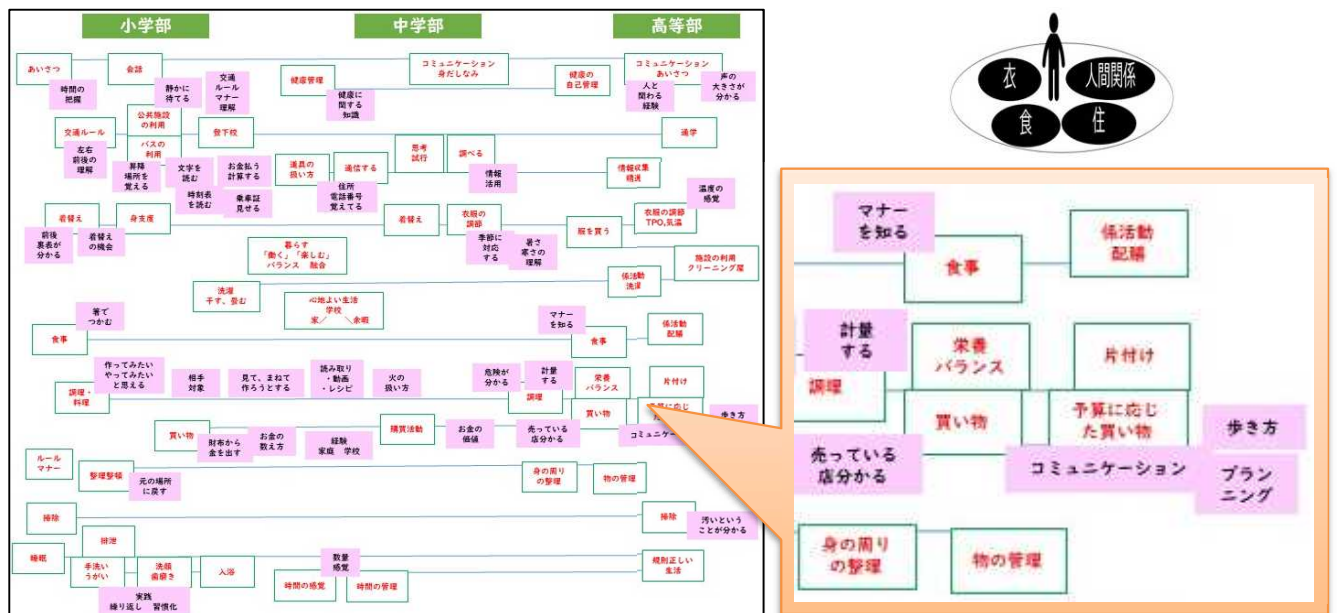


図1 学校で扱っている「くらす」に関わる学習内容



図2 社会人の1日の行動

イテーマの絞り込み

「くらす」に関わる内容は、幅広く、多岐にわたることから、研究協力者の助言などを基に、四つの側面から今後の検討していくテーマの絞り込みを行った（図3）。

「くらす」の内容は、「くらす」に関わり学校で扱う内容は幅広く、多岐にわたること。また、障害者就業・生活支援センター長の牧野氏の助言から、卒業生の支援内容として、自宅よりも地域での行動の方が多くことから、地域での行動に着目すること。生涯学習の側面からは、秋田県教育庁特別支援教育課管理主事の小山氏の助言を基に、「人との出会い、つながり、関わりを充実させること」が挙げられること。生徒の学びの側面からは、くらすWGは、高等部の授業づくりと連携し進めている研究であることから、今年度から開設した問題発見、問題解決を主眼とした学習「Dスタディ」と内容が重なること。教師の思いの側面からは、子どもたちが地域生活への興味・関心を広げ、地域との関わり方などを知ってほしいこと。以上の四つの側面から「みんなが使える場所の利用」について検討することにした。



図3 テーマの設定理由

ウ高等部生徒へのアンケート調査

高等部生徒22名に対して、公共施設等に関わるアンケートを実施した。公共施設等の選定は、秋田市のホームページを参考に図4の公共施設等に関するものとし、認知状況や利用状況、今後の利用希望に関する選択制と記述式でのアンケートを行った。

結果は、認知、利用状況ともに、学年が進行するにつれ高くなる傾向が見られた（図5）。学校で行われる学習や友達の影響が要因の一つと推察される。また、施設に関しては、認知、利用状況ともに、社会教育施設や集会施設が、特に低い値になった。

今後の利用希望に関しては、利用を希望する理由を四点に分類することができた（図6）。

これまで自分が行う必要はなかったが、社会人や卒業後の生活に向けてやってみたいという「必要性」、一度体験（学習）し、また利用したい、次は一人で行きたいという「経験」、友達や先輩が利用していることが分かり、一緒にやってみたいという「人との出会い」、やりたいが、やる場所が分からないという「情報」に関することが見られた。

アンケートから、在学中の学習や先輩や友達などの存在の大切さ、「みんなが使える場所」について、WGで検討していく意義を確認することができた。

- | | | |
|-----------------|---------|------------|
| 図書館 | 博物館・美術館 | 市民サービスセンター |
| 集会施設・コミュニティセンター | 体育館・公園 | |
| ホール | 宿泊施設 | 観光施設 |
| 郵便局 | 病院 | 市役所 |
| 銀行 | 交番・派出所 | |
| 娯楽施設 | 食品を買い場 | 衣服を買い場 |

図4 アンケートに用いた公共施設等一覧

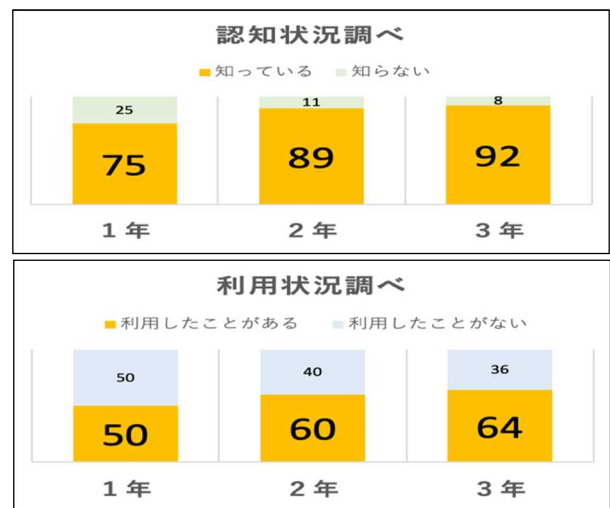


図5 学年ごとの認知状況、利用状況

<p>これまで、家族が行っていたため、必要性がなかった。 (DVD借用、衣服購入等)</p> <p>必要性</p>	<p>学校の学習や友達と一緒に経験したことがある。 今度は一人で行ってみたい (カラオケ、バスケット等)</p> <p>経験</p>
<p>友達や先輩と一緒に利用したい。友達や先輩が利用しているのでしてみたい。 (食事、映画館等)</p> <p>人との出会い</p>	<p>やりたいことはあるが、どこでやれるかわからない。 (体を動かす等)</p> <p>情報</p>

図6 今後の利用希望理由

夏のセミナー

各分野の方々に参加していただき卒業後の支援内容の情報「『みんなが使える場所』を上手に利用するために」の話題提供をいただいた。また、参加者との意見交換では、「情報発信」「人とのつながり」「ロールモデル」について意見を深めた(図7:グラフィックレコーディングの記録より)。

夏のセミナーでいただいた示唆や意見交換を集約すると、図8に示すように、学校においては、「めあてとまとめの整合性」を高めることや、「ロールモデル」が存在することが重要であること。社会においては、頼れる存在がいることや、ネットワークづくり、情報につながることで、情報につながる人につながる大切であることが分かる。

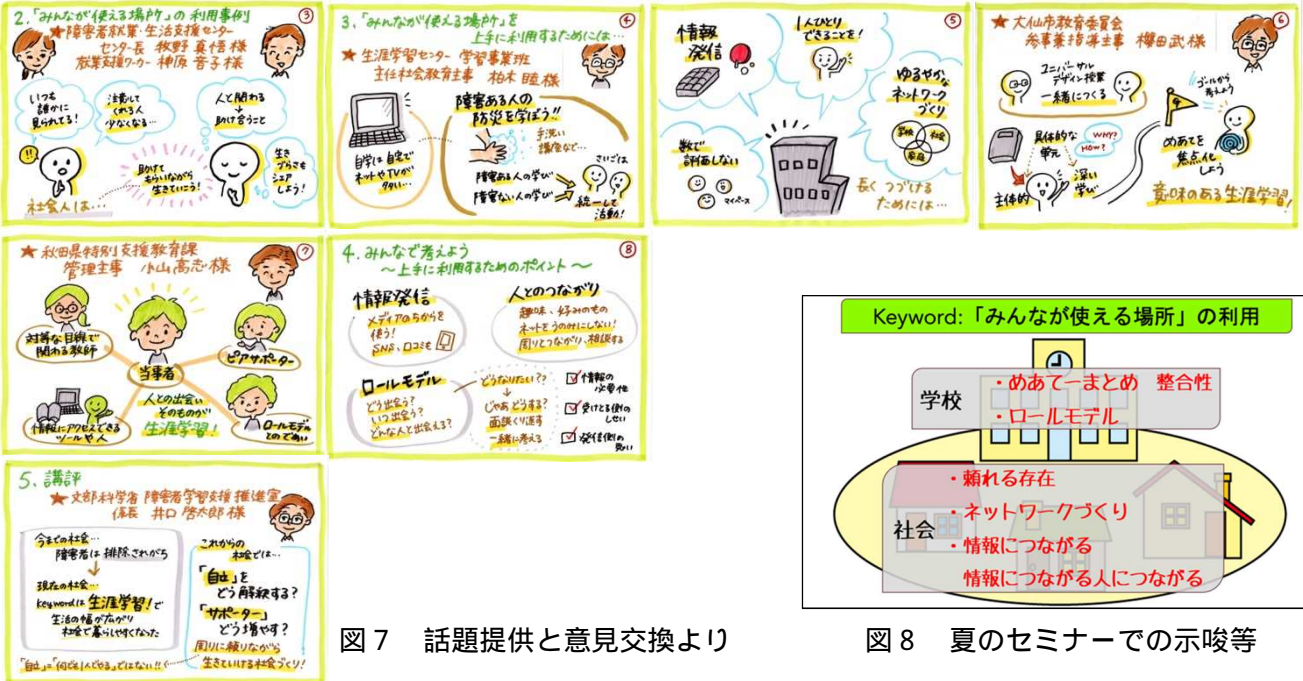


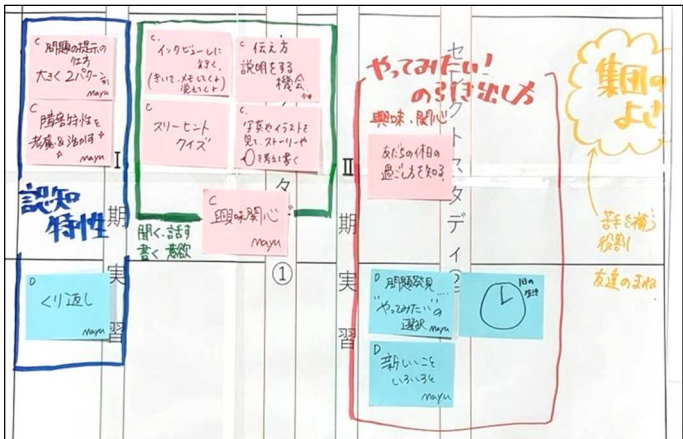
図7 話題提供と意見交換より

図8 夏のセミナーでの示唆等

(2) 授業づくり

つながりミーティング(高等部, くらすWG)

今年度新たに開設した学習「Dスタディ」について、年間指導計画作成前(5月)に高等部職員と、くらすWG職員で検討する機会を設定した。Dスタディのグループ担当職員から所属する生徒の学びの特性や学習のねらいについて説明を受けた後に、学習内容や手立てについてのアイデアを出し合った。Dスタディについて検討した後は、それぞれが自分の学部や学級の学習に生かせるポイントも出し合った。全体を通して、出された意見を集約すると、以下の四点にまとめることができた。



- 「失敗してもやってみる機会の設定」
- 「意図的に他者と関わりをもったり,用事を果たしたりする機会の設定」
- 「経験を広げる機会(直接体験する場面,人の経験を知る場面)の設定」
- 「児童生徒が自分で考えられる機会の設定」

つながりミーティングを通して、学習の展開やねらいについて考えを整理できた。

授業づくり検討会（高等部，くらすWG，研究協力者：櫻田氏）

研究協力者の櫻田氏をお招きし，高等部職員とくらすWG職員で全校授業研究会に向けての授業づくり検討会を行った。年間指導計画やグループのねらいについては事前に高等部で検討していたため，単元計画を中心に検討した。夏のセミナーで，櫻田氏から「めあてとまとめの整合性」「生徒主体の学び」について示唆を得ていたことも踏まえ，単元の検討を行った。検討の中では，目的を明確にすること（焦点化）や生徒へのフィードバックの方法（個の学び 全体の学び），めあてを達成するための単元の展開などについて意見が出された。この検討会で出された方向性を基に，全校授業研究会の提示授業に向け，単元を通して，生徒がめあてを意識し，必要感を感じながら学習に臨めるような単元を展開し，手立てを検討していくことにした。



全校授業研究会

夏のセミナーで得られた示唆と授業づくり検討会を踏まえて，全校授業研究会では，Dスタディの授業を提示した。提示したグループでは，それぞれがやりたいことや行ってみたい場所を出し合い，希望を実現するために，自分たちで学ぶことを話し合い，計画を実行するために必要な事柄を学んだり，実践したりするという展開を行った。当初は，飲食店で飲食を行う予定としていたが，社会の状況等を踏まえて，飲食店でテイクアウトすることを目的とした学習を行った。その中で，生徒たちの「うまかった」「次は をやってみたい」という満足感や意欲や興味の高まりが多く見られた。



全校授業研究会では，協議1「生徒が気付く姿を引き出す手立てについて」と協議2「みんなが使える場所を上手に使うポイント」を行った。協議の中では，以下の点が主な話題として挙がった。

- 「ヒト，モノ，コトとつながる，関わることの重要性」
- 「ゆるやかなネットワークを構築する必要性」

授業実践

高等部Dスタディと同様の授業実践は，小・中学部でも行っている。各学部で「みんなが使える場所」の利用や，自分たちの希望や考えたことを地域の方と関わりながら実現する学習を展開している。



(3) くらすワーキンググループの提案～「ゆるねっと」の作成と活用～

夏のセミナー，全校授業研究会ともに，「ゆるやかなネットワークづくり」がキーワードとして挙がってきている。つまり，生涯学習力を高める上で，重要な要素であると言える。では，「ゆるやかなネットワーク」づくりは，卒業後の一人一人が行うことで，在学中の話ではないかというところではない。在学中から，ネットワークづくりに向けて，種をまく，その種を芽ぶかせる，出た芽を育て，

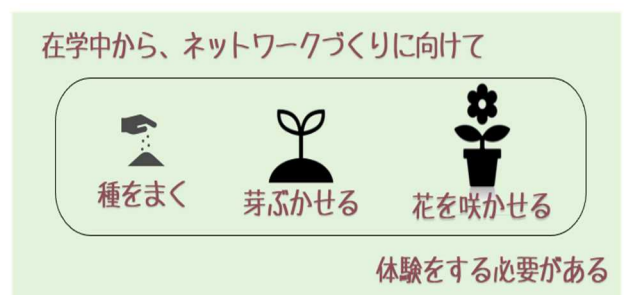


図9

花を咲かせる体験をする必要があると考える(図9)。

種をまく,その種を芽ぶかせる,出た芽を育て,花を咲かせる体験とは,ヒト,モノ,コトと関わることで「楽しい」「心地よい」「充実した」「また,やりたい」というような快の感情を得たり,満足感や充足感,意欲の向上に結び付いたりする体験を指す(図10)。このような体験を小学部段階から継続的に積み重ねる必要があると考える。

加えて,この種をまく,その種を芽ぶかせる,出た芽を育て,花を咲かせる体験や地域とのネットワークを,その学部や学年だけで留めるのではなく,学校として,その可能性を広げていくことが重要であると考え。例えば,小学部でつながっている地域のヒト,モノ,コトを中学部でも利用したり,高等部でも共有したりするシステムがあれば可能性が広がるはずである(図11)。

そこで,卒業後も活用できるネットワークを構築していくための素地づくり,そして,各学部で構築しているネットワークを共有する体制づくりを提案する。

地域社会とのつながりを可視化するのが,ゆるやかなネットワークづくりのためのマップ,通称「ゆるねっと」である。「ゆるねっと」は,Google マイマップのアプリケーションを用いて作成した。

「ゆるねっと」を実現させるメリットとして,次のことが考えられる。

- 人が変わっても持続可能な,地域とともに学ぶ体制
- 新任教師でも,地域に根ざした授業をスムーズに計画可能
- 昨年度の地域資源をまとめた研究成果の利活用
- 他学部とのつながりの薄さという本校の課題に対する解決の一助
- 上学年の学習が分かり,児童生徒のロールモデルをつくる手立て
- 生徒のアイデアを授業に生かす手立て



図10

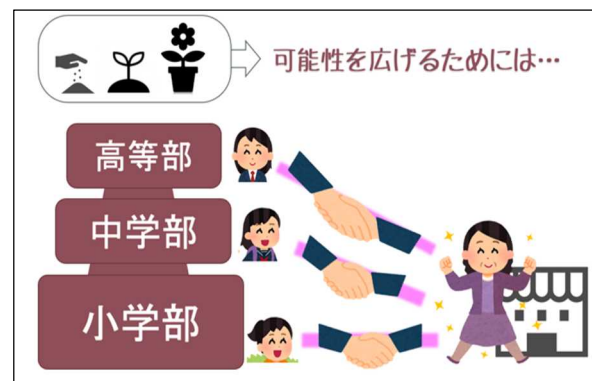
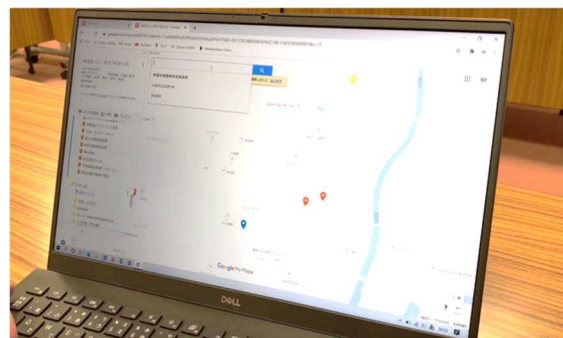
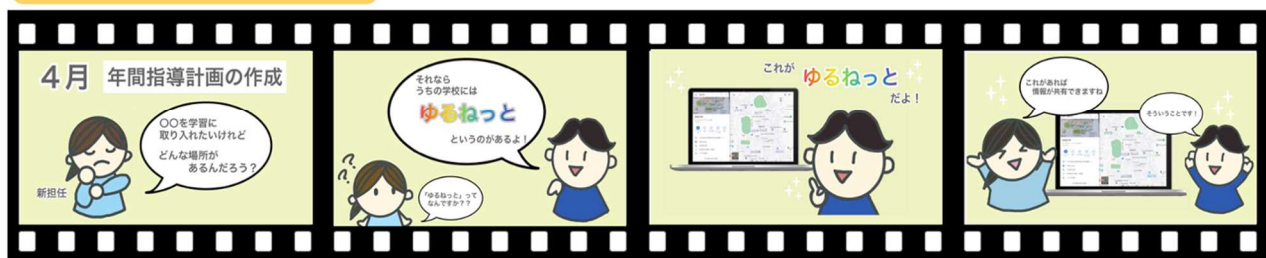


図11



「ゆるねっと」使用例



以上のことから,くらすWGでは「ゆるやかなネットワーク」を構築していくために,学校の職員が気軽に閲覧し,利活用することができる「ゆるまっぷ」を作成することを提案する。

(4) 教育課程の方向性

くらすWGで検討してきた内容や提案，授業実践を基に，次年度の高等部の教育課程を検討した。

Dスタディについて

今年度のDスタディは，1コマ(50分)，週2日の実施であった。1コマずつの実施は，生徒にとって分かりやすい学び方となったとの評価から，次年度も継続していく。一方で，「みんなが使える場所」を訪問しての利用を考慮すると1コマでの実施が難しいため，年間通して3コマ連続の学習時間を定期的の実施する(表1)。

また，今年度は木曜日と金曜日に実施していたが，他の学習との関連や教育的効果を考慮し実施曜日を変更する(表2)。

表1 次年度Dスタディ日程(案)

Dスタディ日程(案)			外: 3時間どり日	発: 学習の様子発表日	セレクトスタディ	
4月	14日 水	21日 水	7月	2日 金	1月	19日 水
	23日 金	30日 金		9日 金		21日 水
	7日 金	14日 水		16日 金		26日 水
	12日 水	21日 水		21日 水		2日 水
	14日 金	27日 金		27日 金		4日 金
	19日 水	1日 水		29日 金		16日 水
	21日 金	3日 金		5日 金		18日 金
	26日 水	8日 水		10日 水		25日 金
	28日 金	10日 金		12日 金		2日 水
	2日 水	15日 水		17日 水		9日 水
	4日 金	22日 水		19日 金		11日 金
	23日 水	24日 金		24日 水		16日 水
	25日 金	29日 水		26日 金		
	30日 水			1日 水		
				3日 金		
				8日 水		
				15日 水		
				19日 金		
				22日 水		
				26日 金		
				1日 水		
				3日 金		
				10日 水		
				15日 水		
				17日 金		
				22日 水		

表2 次年度週時程(案)

時間	月	火	水	木	金
8:30	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)
9:00	運動(20)	運動(20)	運動(20)	運動(20)	運動(20)
9:30	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)
10:00	全校集会 委員会 学部集会 (50)	作業学習 (90)	Dスタディ (50)	作業学習 (90)	Dスタディ (50)
10:30	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)
11:00	保健体育 (100)	休憩(10)	美 術 (100)	生単 《情報》 (50)	生単 (100)
11:30		作業学習 (60)	音 楽 (50)	作業学習 (60)	
12:10	給食 (40)	給食 (40)	給食 (40)	給食 (40)	給食(40) 特別活動
12:50	昼休み	昼休み	昼休み	昼休み	昼休み
13:20			ADL(20)		
13:40	生単 《道路学習》 (75)	作業学習 (75)	SHR(10)	作業学習 (75)	生単 (75)
13:45					
14:30	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)
14:45	SHR(10)	SHR(10)	SHR(10)	SHR(10)	SHR(10)
15:00					

高等部の教育課程について

Dスタディで学んだことを他の学習でも生かすという学習の結び付きを強化していく意図から，次年度は，Dスタディを高等部の教育課程の核と捉え，学習内容を調整したり，追加したりして教育課程を組んでいく(図12)(表2)。

今後は，今年度の研究の成果を生かし，学習内容に「はたらく」「くらす」「たのしむ」のどの観点が含まれた学習かを意識して指導に当たることができるように，三つの観点が編成する枠組みを設定して，教育課程を編成する(図13)。

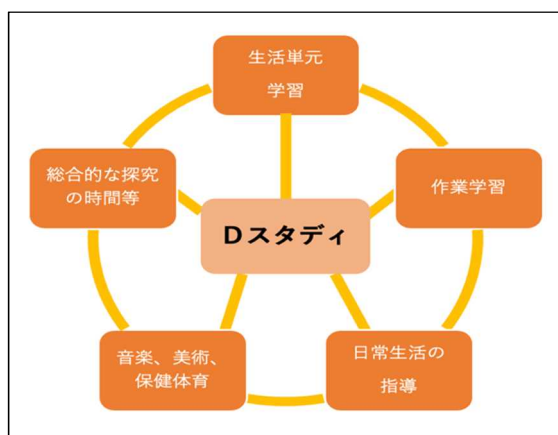


図12 Dスタディの位置付け

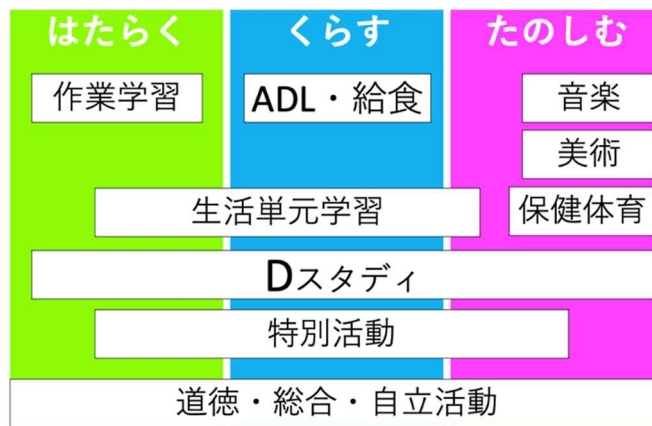


図13 高等部教育課程の枠組み

たのしむワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

昨年度までの研究を通して、生涯学習力を高めるために、「知の欲求の充足」「必要に応じた情報収集、課題解決力」「学びに向かう力」「仲間づくりや良好な人間関係の形成」「社会とのつながり」「ライフステージに応じた学びの機会の設定」が必要であることが分かった。

たのしむワーキンググループ（以下：たのしむWG）では、「楽しむ」視点から生涯学習力を高める教育課程について考える。児童生徒が今もっている「楽しむ力」と、今後必要となる「楽しむ力」を明らかにし、児童生徒の生涯学習力を高める教育課程を編成するために必要なことについて検討する。

2 研究の内容と方法

(1) 期 情報収集・分析	「楽しむ力」という言葉の捉えの確認 ア WG職員によるワークショップ「楽しむ力とは？」 イ LLミーティング ミニビデオ研修会 ～児童生徒の「楽しむ姿」を見付けよう～ 生涯学習力「楽しむ力」についての研修会 ～夏のセミナー「楽しむ力を育むために必要なこと」～
(2) 期 実践	生涯学習力を育む授業実践 ア 授業づくり研修会の実施 イ 生涯学習奨励員の活用

3 研究の実際

たのしむWGでは、夏のセミナーまでを含めた 期と夏のセミナー後の 期と、二つに分けて研究を行った。 期では、「楽しむ」という視点から考える生涯学習力について、情報を収集し分析した。 期では、集めた情報を基に生涯学習力を育むための授業実践を行った。

(1) 期 情報収集・分析

「楽しむ力」という言葉の捉えの確認

アWG職員によるワークショップ「楽しむ力とは？」

「楽しむ」という言葉は抽象的なものであり、その言葉からイメージするものは、一人一人違っている。言葉の定義やWGで話し合うテーマの対象範囲を曖昧にしたままでは、WGの目的の共有が十分に図ることができないため、言葉の捉えを明確にしておくことが必要だと考えた。たのしむWGでの研究を進めるに当たって、初めに「楽しむ」という言葉の捉えを共通理解した。

たのしむWG職員による付箋紙を用いたワークショップを行い、「楽しむ」という言葉からイメージされる活動、力、児童生徒の様子について、意見を出し合い、図にまとめた（図1）。出された意見を整理、分類すると大きく3つに分類できた。

「児童生徒が楽しんで活動している姿」に焦点を当てた意見 ・ 映画、ダンス、カラオケ、工作、調理など
「どんなことに心が動くのか、児童生徒の内面的な心の動き」に焦点を当てた意見 ・ 想像力、気付く力、試す、作り出す喜び、感謝される喜びなど
「活動を楽しむために必要となる力」に焦点を当てた意見 ・ 友達と関わる、表現力、活動の場の広がりなど

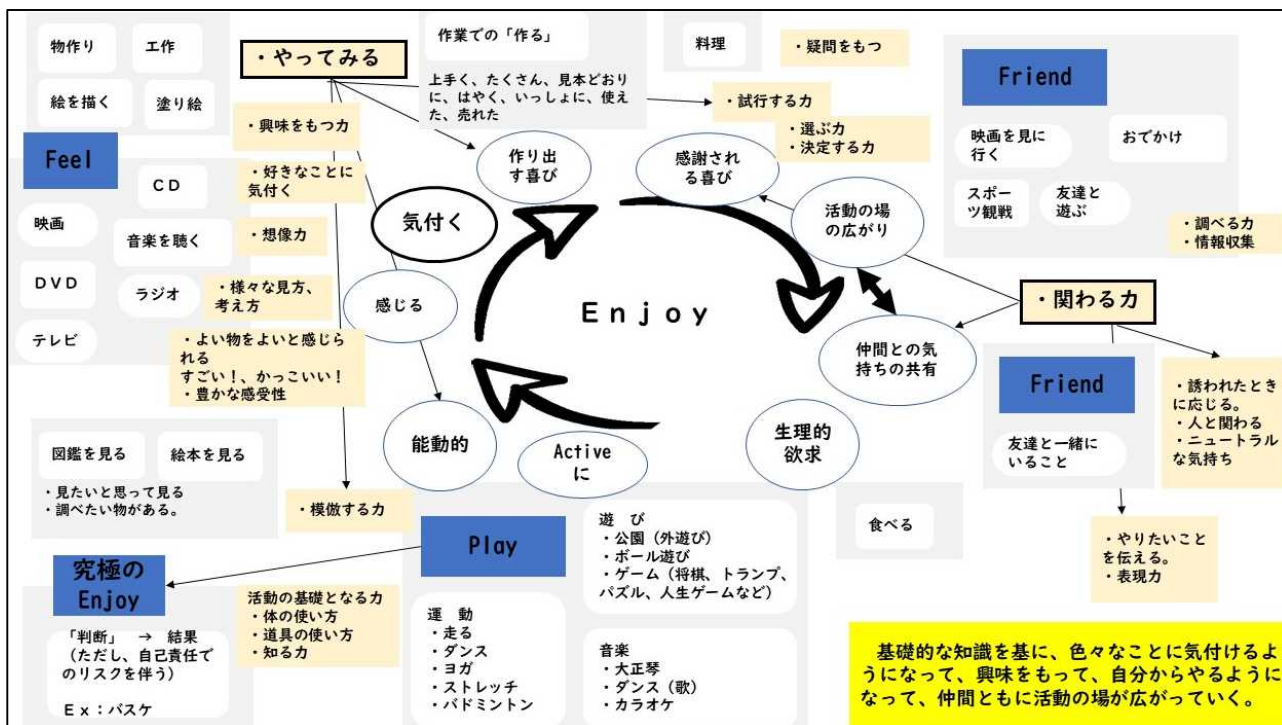


図1 ワークショップ「楽しむ力とは？」

ILLミーティング ミニビデオ研修会～児童生徒の「楽しむ姿」を見付けよう～

生涯学習力を高めるためには、様々なヒト、モノ、コトに触れて心を動かしたり、自分が好きなことに気付いたりする経験を十分に積み重ねることが必要である。子どもの心の動きは、表情や仕草など細かな変化に表れるものの、客観的には把握しにくい。子どもたちが何をしたのかという客観的な事実から、子どもたちが何を感じ、何を思ったのかという心の動きを教師が推察し、子どもの内面を捉えていく必要があると考えた。ミニビデオ研修会では、各学部から事例対象の児童生徒を取り上げ、どのような場面で楽しんでいたか、どのように楽しみを見付けていたか、心の動きを推察した(図2, 図3)。



図2 中学部美術科「むすんでつなげよう」



図3 高等部美術科「うちわを作ろう」

ワークショップで出された意見に加え、授業の中で見取った児童生徒の楽しむ姿や楽しむ力を整理して分類すると、楽しむには、「楽しい活動」と「活動そのものを楽しむ力」があることが分かった。また、楽しむ力には、没頭したり、夢中になったりする力など、「自ら活動に向かう原動力になる力」と「人とつながり、集団の中で発揮される力」があることを、たのしみWG職員で共通理解を図り、その後の研究を進めた。

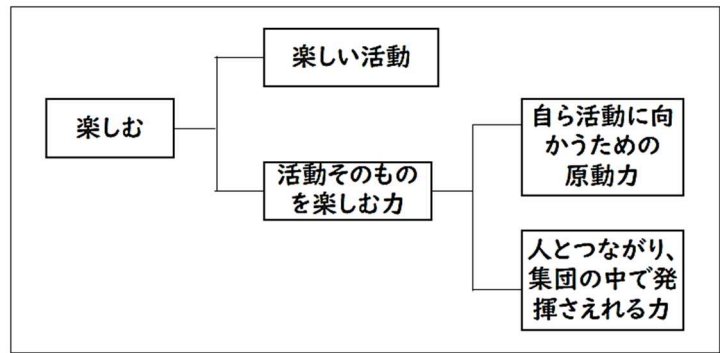


図4 「楽しむ」の捉え

生涯学習力「楽しむ力」についての研修会

夏のセミナーでは、生涯学習に関連した教育活動として二校の事例発表と、研究協力者によるシンポジウム～「楽しむ力」を育むために必要なこと～を行い、次のような示唆を得た(図5)。

夏のセミナーでいただいた助言

夢や願いが実現されている状態は、「楽しむ力」が発揮されている状態

秋田公立美術大学准教授 安藤 郁子 先生

教師も子どもも一緒になって、造形活動を楽しむことが必要

秋田大学教職大学院教授 長瀬 達也 先生

学校以外にも「楽しむ力」を培い、発揮できる場がある

秋田県生涯学習センター社会教育主事補 栗田 寿 先生

夏のセミナーシンポジウム『楽しむ力』を育むために必要なこと
Graphic recording by NPO法人「アーツセンターあきた」齊藤

図5 夏のセミナーで頂いた助言

期(情報収集・分析)の取組を通して、生涯学習力を育むためには、様々なヒト、モノ、コトに触れながら「あっ!」「おもしろい」「やってみたい」と心が動く経験を積み重ねること、「没頭する経験」、「様々な人との関わり」が特に大切だと考えた。様々なことに取り組み中で、自分ならではのやりがいや面白さ、楽しさを見付けて深めていくことができる。そこに、「様々な人との関わり」が加わることで、新たな発見や気づきが生まれ、そして興味・関心が広がるという好循環が生まれる(図6)。この循環は、生涯にわたって学び続けるために、重要なことだと考える。

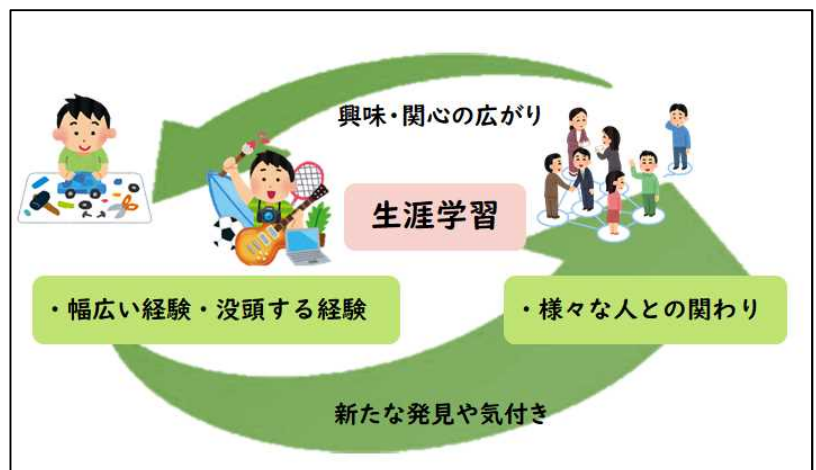


図6 生涯学習力を育むために必要なこと

(2) 期 実践

期では、期の取組から導き出された「幅広い経験」、「没頭する経験」、「様々な人との関わり」をどのように学習活動の中に取り入れていくことができるか、実践を通して検討した。

生涯学習力を育む授業実践

ア授業づくり研修会の実施～様々な人との関わりからの視点から～

夏のセミナーを通して、秋田公立美術大学准教授安藤郁子先生から「夢や願いが実現されている状態は、『楽しむ力』が発揮されている状態である」との示唆をいただき、「児童の願い」を実現できるようにするための支援が必要なことを改めて確認した。また、生涯学習という視点から子どもたちの学びを考えたときに、「地域の中で発揮できる力」が育まれているかという疑問をもった。学校の中だけで「楽しむ力」を育むのではなく、今もっている「楽しむ力」をどのように地域の中で発揮できるようにしていくか、地域と一緒に子どもたちの「楽しむ力」を育む必要があると考えた。

そこで、たのしむWGでは、「児童の願い」を地域の方と共有し、一緒になって支援について考える授業づくり研修会を実施した(図7)。児童が利用している放課後デイサービス職員、地域の生涯学習を推進する生涯学習奨励員等を招いて、「児童の願い」を共有し、それぞれの立場でできることを一緒に考えた。



図7 授業づくり研修会
ふたば学級図画工作科「びりびりぺたぺた」

授業づくり研修会の進め方

- 1 図工で見付けた さんの楽しむ姿の紹介
- 2 願いの共有
「将来地域の中でこんなふうに生活を楽しみたい(楽しんでもらいたい)」
- 3 願いを実現するために必要となりそうな力の検討(今もっている力とこれから育てていきたい力)
- 4 その願いを実現するためにそれぞれの立場で今できること、一緒にできること

研修会后、本校職員で図画工作科の年間指導計画を見直す。

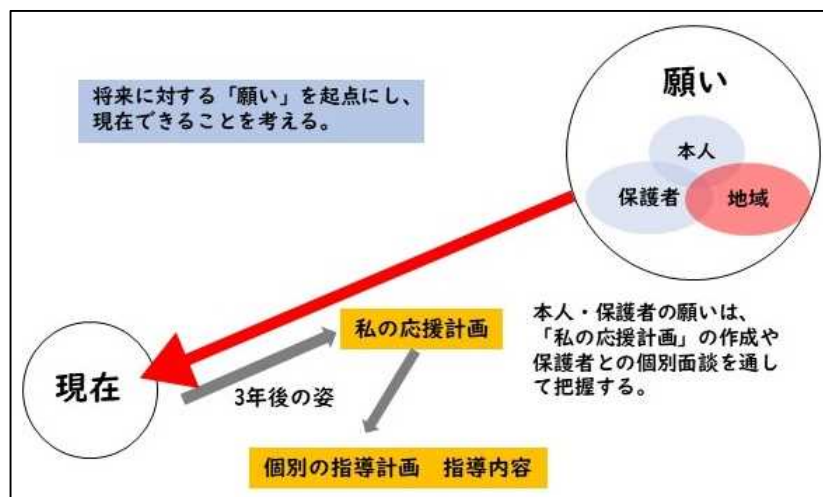


図8 「将来の姿，願いを起点にした授業づくりのイメージ」

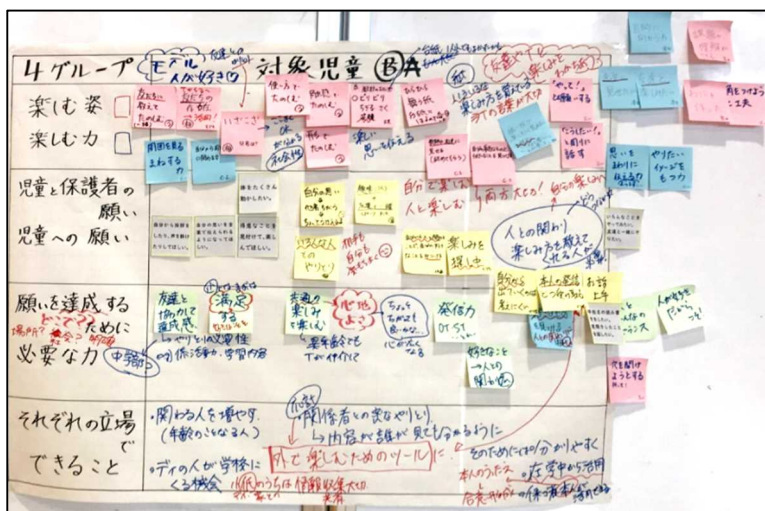


図9 授業づくり研修会ワークショップ

授業づくり研修会「4 それぞれの立場でできること」で出された意見(抜粋)

- ・もっと子どもたちと一緒に活動したい。(生涯学習奨励員)
- ・いろいろな素材に触れる場を提供することができる。(NPO法人アートリンクうちのあかり)
- ・先輩との関わりの場を設ける。(本校高等部職員)
- ・デイサービスの職員が学校に来られるようにする。(放課後児童デイサービス職員)

授業づくり研修会を通して、以下のことが分かった。

- ・児童生徒には、すでに生まれている「楽しむ力」がたくさんある。
- ・子どもの願いを実現するために、生涯学習力を育むために、学校でできること、「地域」でできることがある。
- ・子どもたちの生涯学習に関わりたい、子どもたちのニーズに応えたいという地域の声がある。

以上のことから、次のような取組をすることが生涯学習力を育む上で有効であり、必要なことではないかと考えた。

- ・生涯学習の視点で子どもの姿を捉えるには、「心の動き」に着目した見取り方をする。
- ・地域を活用した授業を行うだけでなく、計画段階から地域と学校が一緒になって授業を考えていく必要がある。
- ・「様々な人との関わり」の機会を確保し、子どもたちの生涯学習を支えるためにも、生涯学習奨励員の活用が有効ではないか。

イ生涯学習奨励員の活用

小学部では、生涯学習奨励員を招いて、図画工作科「わくわくねんどランド」の授業を行った。生涯学習奨励員を活用する目的としては、児童にとっては、様々な表現の仕方に触れたり、作りたいもののイメージを広げたりすること。教師にとっては、児童が奨励員の方と一緒に造形活動するときに働いている児童の「楽しむ力」や、もっと楽しむために必要となる力を知ることを目的とした。



図10 生涯学習奨励員を活用した授業実践

生涯学習奨励員を活用した授業実践の成果と課題

成果

- ・奨励員が作った作品を見て、「同じように作ってみたい!」と活動を模倣したり,新たな発想へと広がったりする様子が見られた。
- ・奨励員を粘土遊びに誘い掛けたり,一生懸命に作った作品を見せたりする様子があった。

課題

- ・「自分から粘土に働き掛け,形の変化に気付いたり,粘土を通して自分の思いを表したりするための手立てや活動が十分ではなかった。
- ・図画工作科のねらいを達成するための支援が十分にできていなかった。

4 まとめ～「生涯学習力」を育む教育課程編成のポイント～

たのしむWGでの取組から,楽しむ視点から考えられる生涯学習力を高める教育課程編成のポイントについて,次の二点を提案する。

一点目は「学ぶ楽しさ」を実感できるようにすることである。様々なことに触れ,心を動かす経験を積み重ねる中で,「楽しいからもっとやってみたい」,「楽しいから,次はこうしてみたい」というように「楽しいから〇〇したい」という思いを学校生活の中で味わっておく必要がある。このような「学ぶ楽しさ」を十分に味わい,生涯学習力の基礎をつくることで,卒業後も生涯にわたって学び続ける児童生徒を育むことができるのではないかと考える。

二点目は「地域と共に」子どもたちの学びを支えることである。たのしむWGでは,地域の力を授業に活用するだけでなく,授業の計画段階から活用することを行ってきた。これまでも学校が主体となって地域資源・人材を活用した取組は行われてきたが,これからは,より地域と一緒にになって児童の学びを支えていく必要がある。将来,児童生徒が暮らす「地域」を十分にイメージできるようにしたり,必要に応じて地域の力を活用した取組を行ったりすることが,児童生徒の生涯学習力を高めるために必要である。また,今,育もうとしている力は地域の中でも発揮できる力なのか,学校だけで行っていた取組を地域の中でできないか,見直す必要がある。

生涯学習力を育むには,「学ぶ楽しさ」と「地域と共に」の両方の視点が必要不可欠である(図11)。この二つを両輪にして,児童生徒の生涯学習を推進していきたい。

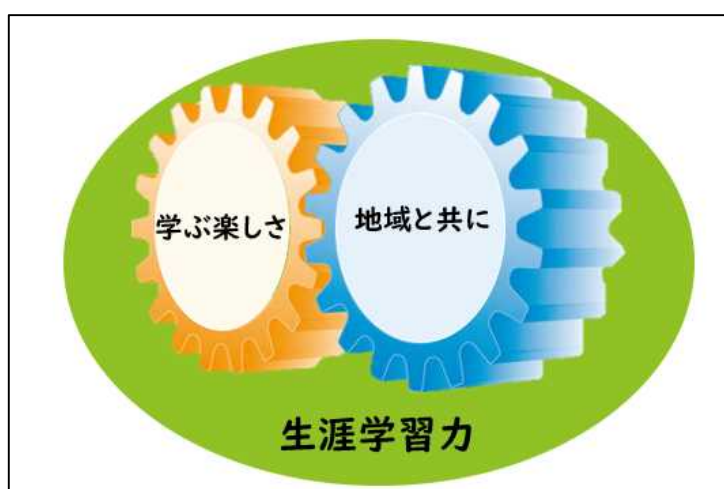


図11 教育課程編成のポイント